「学徒動員と大阪大空襲の記」

匿名（89 歳）

あれからはや 75 年、激しく揺れ動いた昭和の時代も遠くなって、あのつらい戦争体験も世の移ろいと共に風化されつつあります。あの悲惨な体験を思い出し生かして平和の尊さをかみしめ、二度と戦争の無い事を祈ります。

昭和16年 12 月 8 日、太平洋戦争が始まりました。当時小学校 6 年の私は頑張って府立市岡女学校に入学しました。その喜びも束の間で、森下仁丹工場を初め、枚方の香里園造兵廠製造所（陸軍造兵廠香里製造所）に、詳しいことは聞かされずに学徒動員されました。当時14才の女学生でした。戦争も激しくなり親元を離れて粗末な寮に入り朝早くから交代で夜勤もある砲弾造りにと、お国の為、みんな命がけで働きました。ひっきり無しに空襲警報が出て B29 の編隊が飛来して爆弾を落します。その度に製作中の砲弾を箱毎、胸に抱きかかえて一人ずつ防空壕に逃げ込みました。今思えば自殺行為ですが、当時は命より爆弾が大事でした。3月の大阪大空襲では、B29 の大編隊が空をおおい爆弾と焼夷弾を次々と雨の様に落として、大阪の空が真赤に焼けるのが香里の丘の寮から良く見えました。『お父さん、お母さん、早く逃げて下さい。』『どうぞ、命だけは助かって下さい。』と友達どうし抱き合って泣きあかしました。

３月の大阪大空襲のあくる日、眠れない夜を過ごした夜勤が終って非番で帰ろうとして驚きました。大阪方面は一面が焼け野が原で電車も動かず、西九条の私の家も焼

け落ちて枠組だけです。『お母さん!!お母さん!!』と何度呼んでも返事が無く、とうとうあきらめて仕方なく祖母の住む森の宮方面へ向かいました。京橋、森の宮の惨状はすさまじく目をおおう悲惨な光景です。電車は焼けて動かず、此の世の物とは思えない焼け跡を、祖母は大丈夫かと祖母に逢いたい一心で遠い道のりを一人で歩きました。やっと家にたどり着くと足腰の弱った祖母は杖をつき乍ら、顔中涙でくしゃくしゃになって『よかった。恐ろしかったね。』と抱き合って喜びました。祖母は一人息子を戦争にとられ北支で戦死した知らせを聞いてからすっかり元気を無くして痩せ細ってしまいました。色々近況をおしゃべりし乍ら大切に取っておいた玉子を出して私の好物だった玉子丼を作ってくれました。お父さんお母さんは、3月の空襲で、命からがら岡山の親類を頼って疎開した時に祖母も一緒にとさそわれたけど、『ひょっとして息子が帰って来る様な気がして、此の家から離れられへんのやで。』と泣き乍ら話してくれました。もう遅いから泊って行きなさいと云われたけど、香里の寮に今日中に戻らないと先生や友達もみんなが心配するので焼け野が原の恐ろしい光景の中を一人で歩いて寮に帰りました。